

学校運営の舵を取るトップに聞く

# LEADERS

File 03 福井士郎

Shiro Fukui

西大和学園高校 校長



密度の濃い授業と  
多彩な課外活動。  
新しい進学校の  
スタンダードを作りたい

ふくい・しろう

1986年西大和学園高校数学教諭に。高校3学年担任を長年務め「スーパーティーチャー」職ののち2014年より現職。

まとめ／堀水潤一 撮影／有田聡子

## 学年部長による 責任と覚悟を伴う学年運営

本校では原則として、一人の学年部長が中1から高3まで持ちあがり担当します。教科担当同士よりも学年としての考え方が優先され、学年部長の責任のもと、思い切った学年運営を行っています。学年団の構成を決めるのも学年部長の仕事です。毎年、自分が必要とする教員をリクエストして布陣を整えます。当然、優秀な教員には指名が重なりますが、その際は、上級学年が優先されます。シビアですがシンプルな仕組みです。

校長が細かいことに口を挟むことはありません。学年運営を任せることで、責任感とともに覚悟が生じることになるからです。もちろん最終責任は校長にありますが、管理職と同じレベルで熟慮するようにするため、学校が目指す方向性から大きく外れることはありません。

本校の特色として塾や予備校に通う生徒の少なさがあげられます。濃密な授業や充実した補習に加え、模擬国連、東大ライブ講義など課外活動が活発だからです。2002年度から指定されているSGHに加え、14年度にはSGHに指定されるなど文理両面から評価されています。

16年度からは、本格的な受験対策の前にあたる高2の後期に、大学レベルの教育を導入する予定です。ベクトル解析や量子力学などを高校の教員が教えるのです。これまでも大学の講義に触れる機会を数多く設けてきましたが、いわば興味を喚起する内容。今回は大学でつまずか

ないようにするための実践的な授業です。受験とは直接関係ありませんが、入学後を見越した新たな挑戦となるでしょう。

これら多彩なプログラムが、それぞれどういう効果につながっているかはわかりません。けれど創立期のような、「合格できればいい」という感覚から、「この学部でなければだめだ」という明確な意志を生徒から強く感じるようになってきました。東大・京大の全国ランキングで上位をキープしているのも、多くの取り組みの結果。こうしたスタイルがこれからの進学校のスタンダードになるはずですよ。

## 生徒の成長を実感できる やりがいのある仕事

私は校長就任の直前まで、毎年、高3の担任として数学を教えていました。校長として学校の形を作る仕事は意義深いですが、教職の面白味はやはり現場にあります。若い先生が伸びていく様子を見るのは楽しいですが、この時期の生徒の成長力とは比べようがありません。本人や保護者に対するちょっとした暗示によつて、高2まで最下位近い成績であった生徒が難関大学に合格することもありました。残念ながら不合格となり、「お世話になりました」と礼を言いに来る生徒もいます。なかなかできることではありません。そうした子が、翌年いい報告をもってきてくれたときのうれしいこと。創立以来30年近く経ちましたが、いまだに連絡をくれる子もいます。人間を相手にすることの充実感。人の人生にかかわれる、やりがいのある仕事だと実感しています。

西大和学園中学・高校  
(奈良・私立)

1986年西大和学園高校開校。88年西大和学園中学校開校。創立者は、当時奈良県議会議員で文教委員を務めていた田野瀬良太郎 前衆議院議員。創立直後から大学進学実績を急伸させ、一躍全国屈指の進学校に。田野瀬氏著の『田舎の無名高校から東大、京大にバンバン合格した話』が目玉を集める。2002年よりSSHIに、14年にSGHに指定。